「造形デザイン」の知財判決紹介（１２）
―部分意匠の類否判断―
知財高判平成26年11月13日「人工歯」
審決取消請求事件平成25年（行ケ）10281号

京橋知財事務所
弁理士　梅澤　修

【事案の概要】

本件の経緯は，①平成20年6月30日，意匠に係る物品を「人工歯」とする部分意匠の意匠登録出願があり，②平成22年11月9日，特許庁の審査において，新規性がないとの理由（意３条１項３号）で拒絶査定がされ，③平成24年2月14日，その拒絶査定不服審判の請求は，成り立たないとの審決（前審決）がされ，④平成24年11月26日，知財高裁において前審決を取り消す旨の判決（前件判決）がされ，⑤特許庁は再度審理をした結果，平成25年9月9日，「本件審判の請求は成り立たない。」との審決（本審決）をし，⑥原告が，本審決の取り消しを請求したものである。本件判決は，「原告の請求を棄却する」とした。

本願意匠は，【図1】に記載のとおりであり，前件における引用資料である意匠登録第１１９７５３３号の公報は，【図２】に記載のとおりであり，本件における引用資料である意匠登録第１２１３９４８号の公報は，【図３】に記載のとおりである。

両意匠の類否判断のポイントは，原告が本願意匠に存在すると主張する「ファセット面」に関する認定である。前件判決では，「ファセット面」の有無によって，本願意匠と前件引用意匠は非類似と判断されたが，本件判決では，本件引用意匠にも「ファセット面」の存在が認定され，両意匠は類似とされた。

【図1(別紙１)】本願意匠

意匠に係る物品　　人工歯

意匠に係る物品の説明　　本物品は、上顎中切歯用の人工歯である。本物品は、例えば、総義歯、部分床義歯、欠損補綴物または、インプラント上部構造体として使用することができる。

意匠の説明　　写真において、緑色に着色した部分以外の部分が、部分意匠として意匠登録を受けようとする部分である。また、Ａ－Ａ線端面図、Ｂ－Ｂ線端面図及びＣ－Ｃ線端面図においては、実線で表した部分が、部分意匠として意匠登録を受けようとする部分である。

斜視図



正面図



背面図



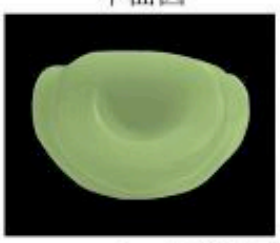
左側面図



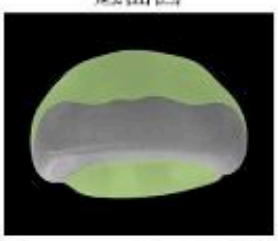
右側面図



平面図



底面図



Ａ－Ａ線端面図



Ｂ－Ｂ線端面図



Ｃ－Ｃ線端面図



【図２】前件引用公報（意匠登録第１１９７５３３号「人工歯」）



【図３(別紙２)】本件引用公報（意匠登録第１２１３９４８号「人工歯」）

意匠に係る物品　　人工歯

意匠に係る物品の説明　　本物品は、総義歯、部分床義歯、または、インプラントにおいて用いられる上顎中切歯用の人工歯である。

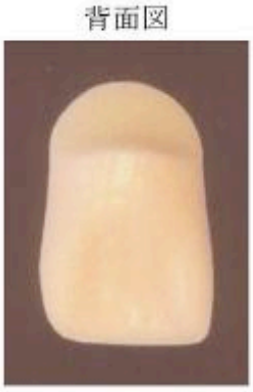
参考斜視図



正面図



背面図



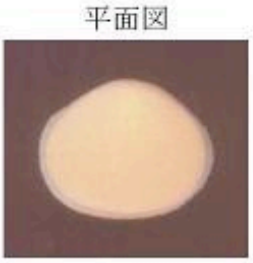
左側面図



右側面図



平面図



底面図



【要旨】

＜本願意匠＞

「意匠に係る物品を「人工歯」とする別紙１の本願意匠目録記載の意匠（上顎中切歯用の人工歯に係る意匠である意願２００８－０１６９０２号の意匠のうち，歯の切縁部付近の部分の形態に係る部分意匠。以下「本願意匠」という。）」（本件判決1頁～2頁）

＜前件判決の理由＞

「前件判決は，概ね以下のとおりの判断をして，前審決を取り消した。

(1) 人工歯を用いて義歯等を調整するのは歯科技工士であるから，人工歯の需要者はまずは歯科技工士であり，歯科技工士に発注する歯科医も間接的な需要者である。これら人工歯の需要者は，天然歯の形状を出発点として，咬合やそしゃくの機能に合致するか否かの観点を第一次的に念頭に置き，製造業者や販売業者から供給される人工歯を観察するが，第二次的には施術の容易性や義歯床への接合具合，審美性の観点，そして意匠上の観点ではないが材質も考慮に入れながら，供給される人工歯を観察する。天然歯の持つ形態に由来する基本的特徴部分は，以上の観点からみて，人工歯に係る意匠の類否判断において，共通点としての位置付けは小さいものというべきである。

(2) 本願意匠の願書に添付した写真のうち左右の側面図及び端面図から，本願意匠の切縁部近傍の舌側面の一部には側面視で直線状の部分（背面視で平面状の部分）があり，舌側面の下端付近に小さな噛み合せ平面であるファセット面が設けられていることが認められる。一方，意匠登録第１１９７５３３号公報記載の引用意匠のうち，本願意匠の意匠登録を受けようとする部分に相当する部分には，かかるファセット面（側面視で直線状の部分）は設けられていない。

(3) 本願意匠は，歯科治療の専門家である歯科医等の需要者に対し，咬合調整の容易化を目指した機能的部分が設けられていることに伴う印象，美感を生じさせるものであるし，需要者が歯科治療，咬合調整の際に強く着目する部分に関する事柄であることにかんがみれば，天然歯の模倣を基調とする人工歯の意匠にあっても，かかる印象は，基本的構成態様を含む，本願意匠と前件引用意匠部分の共通点から生じる印象に埋没することがない。したがって，審決が摘示する他の相違点も合わせて考えれば，本願意匠と意匠登録第１１９７５３３号公報記載の引用意匠は，需要者に対して異なる美感を生じさせ，両意匠は類似しない。」（本件判決2頁～3頁）

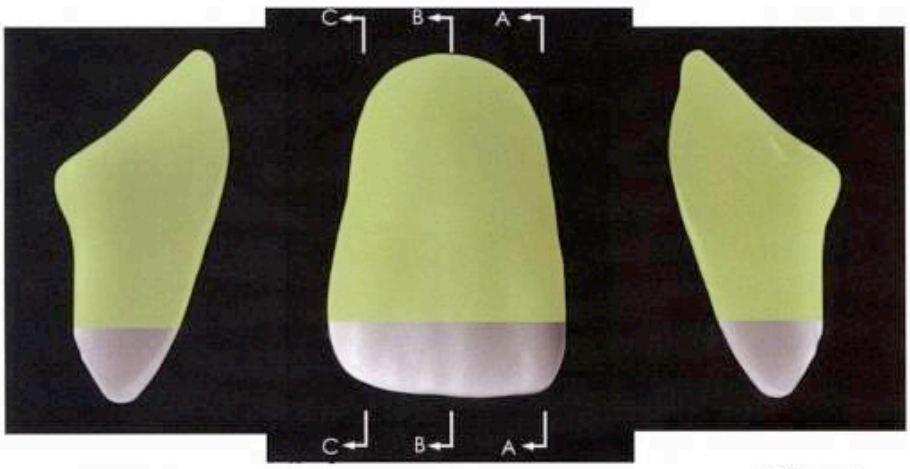
＜本件審決の理由＞

「(1) 審決の理由…の要旨は，別紙１の本願意匠目録記載の各写真において緑色に着色された部分以外の部分（以下「本願部分」という。同別紙の各端面図においては，実線で表された部分が，本願部分である。）は，意匠登録第１２１３９４８号の意匠（別紙２の引用意匠目録記載の意匠。以下「引用意匠」という。）のうち，本願部分との対比の対象となる部分（別紙３及び４の「引用部分」の各写真のうち，緑色に着色された部分以外の部分。以下，同部分を「引用部分」という。なお，別紙３及び４の「引用部分」の各写真は，本願部分と同様の向きとなるよう，別紙２の引用意匠目録の各写真が左右反転されたものであり，引用部分は，引用意匠の左右が反転されたものの切縁部付近の部分である。）に類似するから，本願意匠は，意匠法３条１項３号に掲げる意匠に該当し，同条同項柱書の規定により，意匠登録

を受けることができないというものである。」（本件判決3頁）

【別紙３ 正 面 図 及 び 左 右 側 面 図 の 対 比 】

本願部分



左側面図　正面図　右側面図

引用部分



左側面図　正面図　右側面図

「(2) 審決が認定した本願部分及び引用部分の形態は，以下のとおりである。

【本願部分の形態】

（１）正面視すると，

（１－１）全体の輪郭形状は，略扁平逆台形状であって，正面全面は，底面図を参酌すれば，左右方向に連続する，四つのやや山状の部分と三つのやや谷状の部分とを交互に組み合わせた若干低い凹凸面状を呈し，

（１－２）切縁部の左辺から下辺にかけて，やや大きなアール状を呈し，

（１－３）切縁部の右辺から下辺にかけて，略「Ｊ」の字状を呈し，子細に観察すると，右辺の上端から，右辺の上下略中間位置まで略垂直直線状であって，それに連接して下辺までなだらかな凸弧状を呈し，

（１－４）下辺は，全体がやや右下がり状を呈し，子細に観察すると，三つのやや山状の部分と二つのやや谷状の部分とを交互に組み合わせた極低い略波状を呈している。

（２）右側面視すると，

（２－１）全体は，略逆三角形状であって，

（２－２）左辺（唇側）は，僅かに膨出する凸円弧状であって，

（２－３）右辺（舌側）は，本願部分の全高の約２分の１の高さの傾斜する直線部と，その上方に連接する僅かな高さの略垂直直線部から構成され，当該略垂直直線部の後方（左側面側）には，小さな略倒直角台形状部が表れ，左辺と右辺の成す角度（以下，「先端部角度」という。）は，９０度弱の鋭角であって，

（２－４）先端部は，本願部分の最大左右幅の約５分の１の半径の円弧状を呈しており，当該円弧状部分に連接する直線部下端は，先端部からやや離れているように看取される。

（３）左側面視すると，

（３－１）全体は，右側面視の全体形状の略左右対称状を呈し，

（３－２）左辺は，本願部分の全高の約５分の４の高さの直線部と，その上部に連接する僅かな高さの略垂直直線部から構成され，当該直線部の中央やや上方寄りの後方（右側面側）に，極わずかな突出部が認められる。

（４）底面視すると，

（４－１）全体は，略扁平台形状であって，略上部３分の２の領域には，正面全面の左右方向に連続する極低い凹凸面状が現れ，上辺は，極低い略波状を呈し，左右辺は，略「（ ）」状を呈し，下辺には，倒略扁平「〔 」状の窪み部が形成されている。

（５）背面視すると，

（５－１）全体は，略扁平逆台形状であって，

（５－２）平坦部の形状は，左右側面図及び底面図を参酌すれば，請求人の提出した手続補足書に添付した参考資料７－２に示されたオレンジ色の部分（判決注：別紙４の「本願部分」の背面図上に示されたオレンジ色の部分。以下「本願原告着色部分」という。）の形状と認められる。

すなわち，平坦部の形状は，略左右対称状のやや肉厚の浅い皿の断面形状を想起させる形状であって，切縁部下辺にほぼ接して設けられ，子細に観察すれば，右側の高さが左側の高さより僅かに高い。

なお，当該平坦部の左端付近は，Ａ－Ａ線端面図及び左端付近の短い略垂直太線状のややぼやけた白いハイライト部の存在により，その輪郭形状をおおよそ認識することができるものの，Ｂ－Ｂ線端面図及びＣ－Ｃ線端面図によれば，当該平坦部が存在すると認められる部分は，いくつかの異なる曲率の曲線から構成され，Ａ－Ａ線端面図に表されたような直線部は認識できず，したがって，当該平坦部の左端付近を除く，その他の輪郭形状は，背面図において明確に認識できない。

【引用部分の形態】

（１）正面視すると，

（１－１）全体の輪郭形状は，略扁平逆台形状であって，正面全面は，略平坦面状を呈し，

（１－２）切縁部の左辺から下辺にかけて，やや大きなアール状を呈し，

（１－３）切縁部の右辺から下辺にかけて，略「Ｊ」の字状を呈し，子細に観察すると，右辺の上端から，右辺の上下中間位置よりやや下方まで，やや内側に傾

斜する直線状であって，それに連接して下辺までなだらかな略４分の１円弧状を呈し，

（１－４）下辺は，全体がやや右下がり状を呈している。

（２）右側面視すると，

（２－１）全体は，略逆三角形状であって，

（２－２）左辺（唇側）は，僅かに膨出する凸円弧状であって，

（２－３）右辺（舌側）は，引用部分の全高の約３分の２の高さの傾斜する直線部と，その上方に連接する僅かな高さの垂直に近い傾斜部から構成され，先端部角度は，９０度弱の鋭角である。

（２－４）先端部は，引用部分の最大左右幅の約７分の１の半径の円弧状を呈しており，当該円弧状部分に連接する直線部下端は，先端部にほぼ接しているように看取される。

（３）左側面視すると，全体は，右側面視の全体形状の略左右対称形状を呈している。

（４）底面視すると，

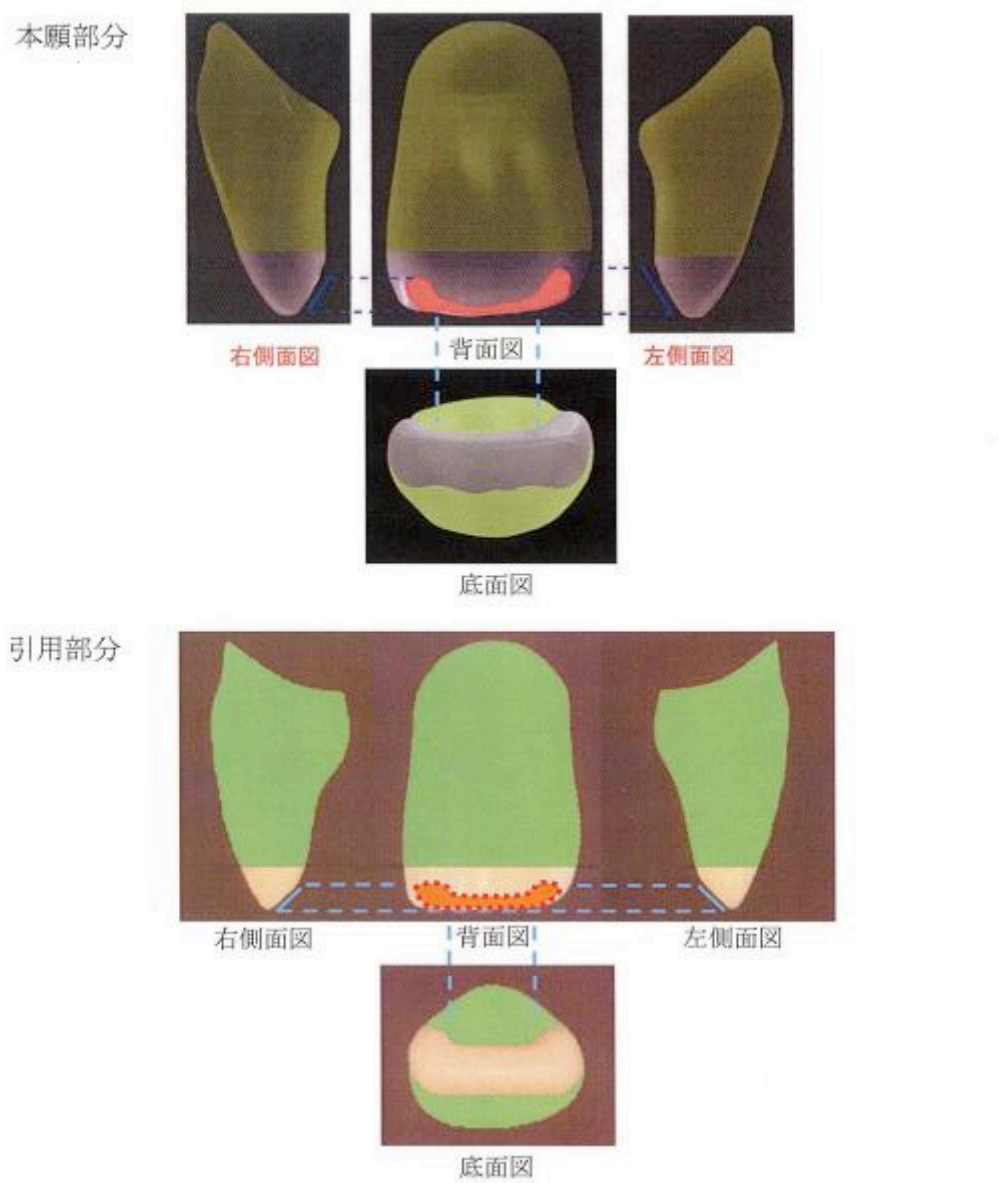
（４－１）全体は，略扁平台形状であって，略上部３分の２の領域は，略平坦面状であって，上辺は，ほぼ水平であり，左右辺は，略「（ ）」状を呈し，下辺には，倒略扁平「〔 」状部の窪み部が形成されている。

（５）背面視すると，

（５－１）全体は，略扁平逆台形状であって，正面視と左右対称形状を呈し，

（５－２）平坦部の形状は，左右側面図及び底面図を参酌すれば，略左右対称状のやや肉厚の浅い皿の断面形状を想起させる赤い破線で表した形状（判決注：別紙４の「引用部分」の背面図に示された，赤い破線で囲まれ，オレンジ色で着色された部分。以下「引用被告着色部分」という。）であって，切縁部下辺にほぼ接して設けられているものと認められる。」（本件判決3頁～7頁）

【別紙４ 背 面 図 の 対 比 】



「(5) 審決の本願意匠と引用意匠の類比判断は，以下のとおりである。

本願意匠と引用意匠は，意匠に係る物品が一致し，また両部分の用途及び機能並びに位置，大きさ及び範囲が一致し，本願部分と引用部分の形態についても，①特に左右側面視すると，舌側の辺に，傾斜する直線部が大部を占めている点（共通点Ｂ），②背面視すると，切縁部の舌側面に，略左右対称状のやや肉厚の浅い皿の断面形状を想起させる輪郭形状の平坦部が，切縁部下辺にほぼ接して設けられている点（共通点Ｄ）は，引用意匠の出願前には見受けられない両意匠のみに見られる特徴ある共通する態様であって，需要者である歯科医等であれば特に注目する部分であって，両意匠の類否判断に大きな影響を及ぼすものであり，両部分のその他の共

通点ともあいまって，看者に強い共通感を与えるのに対し，両部分の相違点が相乗して生じる視覚効果は，上記共通感を覆すほどのものではないから，両意匠は，意匠全体として類似する。」（本件判決8頁～9頁）

＜原告主張の取消事由＞

「審決のいう「平坦部」は，「ファセット面」に対応する部分を意味するものと推察されるところ（「ファセット面」とは，総義歯に必要な対向する人工歯〔上顎の人工歯であれば，下顎の人工歯〕との咬合関係を容易に確立させるために，切縁部にあらかじめ削合調整を施して形成された面である。），本願部分のファセット面の形状は，本願意匠の出願時の願書に添付した各写真（右側面図，左側面図，底面図）及び図面（Ａ－Ａ線端面図，Ｂ－Ｂ線端面図及びＣ－Ｃ線端面図）によって明確に認識することができる。」（本件判決11頁）

「しかし，引用意匠の図面には本願意匠のように端面図が含まれておらず，引用意匠が掲載された意匠公報のいずれの図面からも，引用被告着色部分の形状を認識することはできないから，同部分は，被告が恣意的に断面を想定して定めたものである。」（本件判決17頁）

「(2) 相違点の評価の誤りについて

ア 相違点ａ－１（正面視の凹凸面形状）について

審決は，相違点ａ－１については，「・・本願部分の凹凸の深さは僅かなものであり」と評価した。

しかし，同相違点は，明瞭に視認できる大きな相違点であるから，類否判断に強い影響を与えるものである。

この点，被告は，本願部分の凹凸面状の起伏は，部分意匠である本願意匠の特徴部分とは到底認定できないと主張するが，部分意匠であるからといって，特徴といえる形態（平坦部）と特徴といえない形態とに分けて，特徴といえない形態を実質的に無視して類否を判断するという手法は誤りであり，類否判断は，平坦部（ファセット部）とそれ以外の部分の形態とを総合的に観察して行うべきである。」（本件判決21頁）

「キ 相違点ｃ（底面視の凹凸面状及び略波状）について

審決は，相違点ｃについて，「その差異が，格別顕著な視覚効果を生じているとは言い難く，この点が，両意匠の類否判断に及ぼす影響は，微弱である。」と評価した。

しかし，同相違点は明瞭に視認できる大きな相違点であるから，類否判断に強い影響を与えるものである。」（本件判決25頁）

＜被告の反論＞

「(2) 相違点の評価の誤りについて

ア 相違点ａ－１（正面視の凹凸面形状）について

本願部分の唇側面側全体に現れる山状及び谷状の僅かな起伏は，意匠登録を受けようとする部分とそれ以外の部分の境界線により，途中で分断され，まとまりのある創作の一単位とならないような態様で現されている。このため，該部位は，部分意匠である本願意匠の特徴部分とは到底認定できないものである。

したがって，人工歯全体あるいは人工歯の唇側面部分全体について意匠登録を受けようとする場合に，当該凹凸面形状が類否判断に強い影響を及ぼすことはあっても，部分意匠である本願部分においては，その凹凸面形状は意匠登録を受けようと

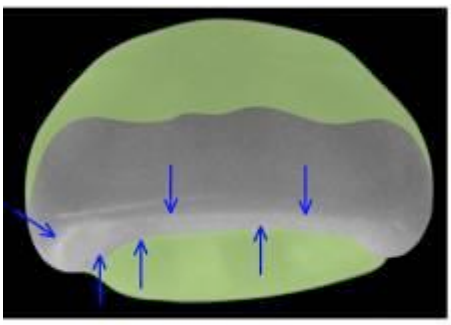
する部分に一部が切り取られた形で現されたものであって，具体的な類否判断の対象となるものではなく，明確な相違点として大きく評価されることはない。
よって，相違点ａ－１は，本願意匠の主たる特徴とは言えず，この起伏の深さも僅かなものであるから，審決の評価に誤りはない。」（本件判決34頁）
「キ 相違点ｃ（底面視の凹凸面状及び略波状）について
本願部分の唇側面側全体に現れる山状及び谷状の僅かな起伏は，意匠登録を受けようとする部分とそれ以外の部分の境界線により，途中で分断され，創作の一単位とならないような態様で現されている。このため，該部位は，本願意匠（部分意匠）の特徴部分とは到底認定できないものである。
したがって，人工歯全体あるいは人工歯の前面部分全体について意匠登録を受けようとする場合に，当該凹凸面形状が類否判断に強い影響を及ぼすことはあっても，本願部分においては，その凹凸面形状は，意匠登録を受けようとする部分に一部が切り取られているのみで具体的な類否判断の対象となるものではなく，明瞭な相違点として大きく評価されることはない。
よって，唇側面側の切縁部における該部位は，本願意匠（部分意匠）の主たる特徴とは言えず，この起伏の深さも僅かなものであり，格別顕著な視覚効果を生じているとは言い難いから，審決の評価に誤りはない。」（本件判決36頁）

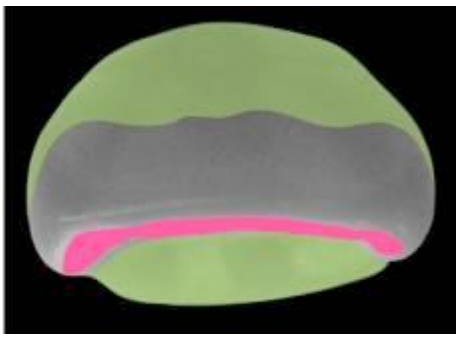
＜当裁判所の判断＞
「当裁判所は，原告の主張はいずれも理由がなく，審決にはこれを取り消すべき違法はないものと判断する。その理由は，以下のとおりである。」（本件判決38頁）
１ 本願部分の形態の認定の誤りについて
(1) １－４（正面視の下辺の形状）の認定について
…(省略)…
(2) ２－３（右側面視の先端部角度）の認定について
…(省略)…

「(3) ５－２（背面視の平坦部の形状）の認定について
ア 原告は，本願部分の舌側面の平坦部の左側部分（右側面側）だけではなく，中央付近及び右側部分（左側面側）の輪郭形状も，本願意匠の端面図，左右側面図及び底面図によって本願原告着色部分のとおり特定できるから，これらの輪郭形状を明確に認識できないとの審決の認定は誤りであると主張する。
しかし，そもそも，本願原告着色部分は，原告が審判時に提出した本願意匠の背面図に参考として記入した形状にすぎず（甲７の１・２），本願意匠の背面図自体からは，本願部分の舌側面の中央付近及び右側（左側面側）に，本願原告着色部分のような形状をしている平坦部（背面視で平面状の部分）が存在することは看取できない。そして，本願意匠の左側面図及び右側面図によれば，それぞれの舌面側の一部に側面視で直線状の部分があること，Ａ－Ａ線端面図によれば，背面からみて左側部分の端面の舌面側にも，短い直線状の部分があることが認められるものの，Ｂ－Ｂ線端面図及びＣ－Ｃ線端面図には，これを子細に看ても，明確な直線状の部分があるとは認められない。したがって，これらの図面によっても，本願部分の背面の中央付近及び右側の平坦部の形状は明確ではない。もっとも，本願意匠の底面図によれば，本願部分の全高の下端から略３分の１よりも下の高さの範囲には光の濃淡がある部分があり，そのうち，概ね，下図１－４（原告の主張１(3)の図１－４と同じ）の右側の図のピンク色の着色部分に相当する部分が，他の部分よりも白っ

ぽく映っていること（ただし，同図の左端から右端方向へ向かうにつれて白っぽい部分と他の部分との境界は徐々にぼやけていっており，特に右端部分では，ピンク色の着色部分のような輪郭となっていることまで明確に読み取ることはできない。）が認められるから，同白っぽい部分の形状及び上記左側面視で直線状の部分の存在を併せ考慮すれば，本願部分の背面の右側（底面図の左側）にも，概ね，やや肉厚の皿の立ち上がり部分の断面形状のような平坦部が存在し，これと連続して，中央付近にも帯状（やや肉厚の皿の平面部分の断面形状）の平坦部が存在することを認めることができる。

【図１－４ 】





しかし，上記底面図は，本願部分全体を底面側から撮影した写真であるから，上記平坦部の正確な奥行（切縁部から歯頸部方向へ向けての長さ）は不明であるし，左側面図から看取される側面視で直線状の部分は，上記平坦部内の線であると推認されるが，その正確な位置を特定することは困難である上，同線のみによっては背面の右側の平坦部全体の形状は特定できない。また，そもそも，上記のとおりＢ－Ｂ線端面図及びＣ－Ｃ線端面図には明確な直線状の部分は認められないことからすれば，背面部中央付近及び右側の平面部の表面は，クリアカットな面ではなく，少なくとも一部においては周囲の面との境界が明確ではない，緩やかな曲面であると認められる（本願意匠の背面図においても，右側は，切縁部から本願部分の上端までほぼ同一の色合いとなっており，原告の主張する本願原告着色部分とそれ以外の部分とで陰影の変化等は生じていないことからすれば，平坦部とそれ以外の部分との境界線上で，明確な高さの変化は生じていないことが窺われる。）。そうすると，本願意匠の背面図，左右側面図，端面図及び底面図によっても，本願部分の背面の平坦部の中央付近及び右側部分（左側面側）の明確な輪郭形状は不明であり，これらの部分が本願原告着色部分のとおりの輪郭形状であるとまでは特定できないというべきである。

したがって，この点についての審決の認定に誤りがあるとは認められず，原告の主張は理由がない。

イ 原告は，本願原告着色部分のとおり，本願部分の唇面側の平坦部の右側の高さは左側の高さよりも明らかに高く，また，平坦部と切縁部下辺との間には「間隔」があるから，「（右側の方が）僅かに高い」，「（平坦部が）切縁部下辺にほぼ接して」設けられている，との審決の認定は誤っているなどと主張する。

この点，本願部分の左側面図の直線状の部分は右側面図の直線状の部分よりも長く，底面図から見ても，平坦部の右側の方が奥行がある様子がうかがえることからすれば，平坦部の右側の高さ（切縁部から歯頸方向への長さ）の方が左側の高さよ

りも高いものと推認することができる。しかし，上記アのとおり，左右側面図の直線状の部分の平坦部内の位置を正確に特定することは困難であり，平坦部の右側の輪郭形状が本願原告着色部分のとおりであるとまで特定することができないことからすれば，平坦部の左右の高さの違いの程度が明確であるとはいえないし，左側面図の直線状の部分と右側面図の直線状の部分の差から推認される左右平坦部の高さの違いは，平坦部全体の高さと比べれば相対的に小さいものであるといえるから，右側の高さが左側の高さより「僅かに高い」と評価した審決の認定が誤っているとは認められない。

また，本願部分の平坦部の中央付近及び右側部分が本願原告着色部分のとおりの輪郭形状をしているとまで特定できないことは上記アのとおりであり，同輪郭形状を前提として本願部分の切縁部の下辺と平坦部の下辺との間の「間隔」の存在を認定することはできない。そして，少なくとも本願意匠の背面図の左側の略垂直状のハイライト部分（平坦部の左側の輪郭形状を示していると認められる。）は，切縁部にほぼ接しているように看取されること，右側面視した場合の先端部の円弧状部分に連接する直線部下端も先端からやや離れているようにしか看取されず（審決の本願部分の形態の認定２－４），左側面視した場合の先端部の円弧状部分に連接する直線部下端やＡ－Ａ線端面図から視た場合の先端部の円弧状部分に連接する直線部下端も同様であり，Ｂ－Ｂ線端面図やＣ－Ｃ線端面図では平坦部に当たる曲面と下端部に当たる曲面との明確な区別もできないことからすれば，平坦部は，少なくともその一部においては切縁部とほぼ接する位置に設けられているものと推認されるから，「ほぼ接して設けられている」との審決の認定に誤りがあるとは認められない。」（本件判決39頁～42頁）

２ 引用部分の形態の認定の誤りについて

(1) １－３（正面視の下辺右隅の形状）の認定について

…(省略)…

(2) ２－３（右側面視の先端部角度）の認定について

…(省略)…

(3) ２－４（右側面視の先端部形状）の認定について

…(省略)…

「(4) ５－２（背面視の平坦部の形状）の認定について

原告は，引用意匠の左右側面図から特定できるのは，引用部分の背面における，左右側面側の平面部（平坦部）の上端の位置と下端の位置程度であり，引用意匠のいずれの図面からも，引用被告着色部分の形状は認定できないと主張する。

確かに，引用意匠の左右側面図によれば，それぞれの舌面側の一部に側面視で直線状の部分があることが認められるだけであるから，引用部分の背面に平坦部があることや，その形状は認定できない（なお，審決が相違点ｄ－３について「引用部分は，全体の輪郭形状を明確に認識できない」と認定しているとおり，審決においても，引用被告着色部分は，平坦部のおおよその形状を示すものであって，厳密な形状を示すものとして認定されているものではない。）。しかし，一方，引用意匠の底面図によれば，底面図のほぼ中央に看取される略水平線状のハイライト部の下部（底面視で，舌側面の領域）に，下辺が倒略扁平「〔 」状に窪み，中央付近が帯状で，左右に，略左右対称状で中央付近よりも上下の幅が広い皿の立ち上がりの断面形状のような領域があり，同領域内はほぼ同一の光沢度合い（光の反射の程度が同じ）であること（ただし，上記ハイライト部は，左右の端ではぼやけており，上

記左右の領域の光沢度合も，周辺では徐々にぼやけているため，上記領域の左端及び右端の境界線や正確な形状は不明である。）が認められる。そして，前記(3)のとおり，上記ハイライト部は，ほぼ引用部分の先端部に位置すると認められるところ，別紙５の引用意匠の左右側面図と底面図との対比のとおり，左右側面図から看取される直線部の上端と下端は，それぞれ，上記中央付近が帯状で，左右が略対称状の領域内に存し，概ねその上端と下端に相当すると認められるから（底面図と左右側面図とを通る水平な二本の青色の補助線参照），仮に上記各直線部が稜線であるのであれば，底面図の上記領域内には，稜線の部分に，ハイライトが生じると考えられるところ，そのようなハイライトは看取されない。そうすると，左右側面図から看取される直線部は，その左右に異なる角度の平面が存する「稜線」ではなく，連続した高さの平面状の部分（平坦部）内にあり，同平坦部は，これと同一の光沢度合い（光の反射度合い）となっている帯状の中央付近の部分とも連なっていると推認するのが相当であるから，底面図及び左右側面図を併せ考慮すれば，引用部分の背面にも，切縁部下部にほぼ接して，概ね中央付近が帯状で，左右に略左右対称状で中央付近よりも上下の幅が広い皿の立ち上がりの断面形状のような平坦部（全体としてみると，略左右対称状のやや肉厚の浅い皿の断面形状を想起させる形状の平坦部）が設けられているものと認められる。

したがって，引用部分の背面に，引用被告着色部分のような形状の平坦部が設けられているとの審決の認定が誤りであるとは認められない。

なお，原告は，引用意匠の底面図の舌側面の形状は前歯の人工歯においてはありふれた形状であり，これを根拠として平面部の形状を特定した場合，引用部分の平坦部の形状を特徴ある態様であると評価することはできないと主張する。しかし，原告が指摘する公知の人工歯の意匠（甲１２２の８，１２２の１４，１２２の１５）は，いずれも左右側面図において直線部が看取されず，したがって，そもそも背面に平坦部が存するとは認められない意匠であるから，引用部分の底面図に表れた形状が，これらの意匠の底面図に表れた形状と類似しているとしても（なお，これらの公知の人工歯は，底面図からみたときの先端部の位置も，引用部分とは異なり唇面側にあり，甲１２２の１４・１５の意匠については，倒略扁平「〔 」状の窪みの具体的形態も異なる。），引用部分の背面の形状が，これらの公知意匠と同様のありふれた形状であるということはできない。したがって，原告の主張は理由がない。」（本件判決43頁～45頁）

３ 共通点の認定の誤りについて

…(省略)…

「４ 類比判断の誤りについて

(1) 共通点の評価の誤りについて

原告は，①共通点Ｂは，相違点ｂ－１に埋没し，類否判断に大きな影響を与えない，②共通点Ｄはそもそも共通点ではないと主張する。

しかし，②の主張に理由がないことは，前記３(2)で判断したとおりである。

また，①の主張については，切縁部下辺の背面に平坦部が設けられており（共通点Ｄ），そのため，左右側面視をしたときの舌側の辺に，傾斜する直線部が大部を占めている点（共通点Ｂ）は，引用意匠の出願前の公知の人工歯の意匠には見受けられない（原告も争っていない。），本願部分と引用部分の特徴ある態様であり，したがって，人工歯の需要者である歯科医等であれば，特に注目する部分であると

いえること，本願部分と引用部分の左右側面視において，直線部が舌面側の辺に占める割合は大きく，本願部分と引用部分の各背面に存在する本願原告着色部分と引用被告着色部分が占める割合も大きいことからすれば，共通点Ｄ及びこれに起因する共通点Ｂが需要者に与える影響は大きいというべきであり，両意匠に共通する美感を強く生じさせているものといえる。これに対し，本願部分の左右側面視したときの直線部の長さの違い（審決の形態の認定２－３，３－２によれば，それぞれ，全高の約２分の１と全高の約５分の４の高さ）は，これが舌面側の辺全体において占める割合は大きいものとはいえないことからすれば（なお，本願部分を左側面視したときには，直線部の中央やや上方寄りの後方にわずかな突出部が目に入ることにより，視覚的にも側面視での直線部の長さの違いが大きく目を惹く態様となっていない。），共通点Ｂが相違点ｂ－１に埋没するものであるとは認められない。

(2) 相違点の評価の誤りについて

ア 相違点ａ－２，ａ－３，ｂ－１，ｂ－２，ｂ－３について

原告は，上記各相違点は，明確に視認できる大きな相違点であり，特に，相違点ａ－２（切縁部の下端辺の略波状形状），ａ－３（正面視右隅の形状），ｂ－１（左右直線部の長さの相違），ｂ－２（切縁部先端の円弧状の半径），ｂ－３（切縁部の舌側の直線部下端）は，本願意匠が「高齢者の歯，すなわち長年使用されて各部が磨耗した歯であることをイメージ」しているのに対し，引用意匠が「生え出したままで一切磨耗していない仮想の天然歯のイメージ」で開発がされていることの現れであり，本願意匠と引用意匠とは，対象とする患者，主な用途，人工歯の需要者に対して全体として生じさせる印象が異なると主張する。

しかし，引用意匠も，意匠に係る物品を「総義歯，部分床義歯又はインプラント」において用いられる人工歯とするものであるところ，一般的に，高齢者の歯の形態の特徴が原告の主張するようなものであることや，引用意匠がこれとは異なり若者の歯の形態の特徴を備えており，したがって若年者を主な患者として想定していることを認めるに足りる証拠はなく，上記各相違点から，原告の主張するようなイメージの差や用途の差が生じるとは認められない。

そして，相違点ｂ－１の左右直線部の長さの相違が，舌面側の辺全体において占める割合は大きいものとはいえず，目を惹くものとなっていないことは前記(1)のとおりであるし，相違点ａ－２（切縁部の下端辺の略波状形状），ａ－３（正面視右隅の形状）も，本願部分と引用部分との視覚的な差異は極めて小さく，原告の主張する人工歯の部位等の特徴を考慮しても，前記(1)の各共通点が需要者に強く生じさせる共通する美感を超えて，需要者の目を惹くものとは認められない。また，相違点ｂ－２，ｂ－３については，確かに，これらの相違点により，本願部分の先端部の方が，引用部分の先端部よりもやや丸みを帯びた印象を与え，引用部分の先端部の方がややシャープな印象を与えているということができるが，引用部分の先端がエッジを備えているとまでは認められないことは前記２(3)のとおりであるから，その丸みの程度の差は大きいとはいえないし，本願部分と引用部分の唇側と舌側の両辺がなす先端部角度（両辺の位置関係）自体はほぼ同じであることとも相まって，相違点ｂ－２，ｂ－３が，前記のとおりの共通点Ｂ，Ｄが与える両意匠の共通の印象を凌駕し，全体として看者に対して，異なる印象を与えるとまでは認められない。

イ 相違点ｂ－１，ｂ－３，ｄ－２について

原告は，相違点ｂ－１（左右直線部の長さの相違），ｄ－２（平坦部の左右の高さの違い）の相違は，平面部の遠心側の縦方向の長さ（高さ）が近心側の長さ（高さ）より長い（高い）かどうかの違いを意味し，また相違点ｂ－３（切縁部の舌側

の直線部下端）の相違は，平坦部が切縁では接触しないような位置に設けられているかどうかの違いを意味し，これらは，平面部が需要者からファセット面として認識されるか否かという明確な違いを生じさせるものであるから，類否判断に強い影響を与えるとも主張する。

しかし，相違点ｂ－１，ｄ－２については，そもそも本願部分の平坦部の左右の高さの違いの程度も明確ではなく，相対的には僅かであることは前記１(3)イのとおりであるし，引用部分の左右側面視の直線状の部分はほぼ同じ「長さ」ではあるものの，別紙５の引用意匠の左右側面図と背面図との対比によれば，右側面図（遠心側の面。左右反転すれば，本願部分の左側面図に相当する。）の直線状の部分の上端の位置の方が，左側面図の直線状の部分の上端の位置よりもやや高いことが看取できることからすれば（同別紙の左右側面図及び背面図の水平の青色の補助線参照），これらの各直線状の部分の平坦部内の正確な位置を特定することはできないため平坦部の左右いずれの方が高いとまでは認定できないものの，左右側面視の直線状の部分がほぼ同じ「長さ」であることをもって，看者が引用部分の平坦部はファセット面ではないと認識するとまでは認められない。

また，相違点ｂ－３についても，そもそも本願部分も平坦部全部が下端辺と明確に間隔が空いているとまでは認められないことは前記１(3)イのとおりであるし，引用部分の平坦部の全体形状が明確ではないことからすれば，左右側面視で見える直線状の部分が切縁部にほぼ接しているように看取されることをもって，看者が引用部分の平坦部はファセット面ではないと認識するとも認められない。

したがって，相違点ｂ－１，ｂ－３，ｄ－２によっても，前記のとおりの共通点Ｂ，Ｄが与える両意匠の共通の印象を凌駕し，全体として看者に対して，異なる印象を与えるとまでは認められない。

ウ 相違点ａ－１（正面視の凹凸面形状），ｃ（底面視の凹凸面状及び略波状）について

原告は，正面視及び底面視から看取される唇側面の凹凸面形状の有無は，明瞭に視認できる大きな相違点であると主張する。しかし，本願意匠が，人工歯の切縁部付近に関する部分意匠であることにかんがみると，本願部分と引用部分の全体を総合して類否を判断する手法を採っても，需要者の注意を強く惹くのは，当該部分意匠の範囲内で全体として一つの意匠的なまとまりを形成する部分であるというべきである。そして，本願部分の唇側面の凹凸面形状は，その全体意匠においては，正面視で切縁部から歯頸部までの長さの約２分の１以上にわたっているところ（甲１５０），本願部分は，そのうち約２分の１程度（歯全体の下方約４分の１）の範囲のみの切縁部付近を対象とした部分意匠であるから，凹凸面形状は１つの意匠的なまとまりを形成しているものとはいい難く，本願部分を看た需要者の注意を強く惹く部分とはいえない。

したがって，相違点ａ－１，ｃが，前記のとおりの共通点Ｂ，Ｄが与える両意匠の共通の美感を凌駕し，全体として看者に対して異なる印象を与えるものとは認められない。

エ 相違点ｄ－１（背面視左側のハイライト部の有無）について

本願意匠は，人工歯に係る意匠であるところ，背面視左側のハイライト部は，当該人工歯自体に付された色や模様ではなく，写真撮影の際の光の具合により，写真上において生じたにすぎないものと解されるから，ハイライト部の有無自体をもって，本願部分と引用部分との間に相違点が存するということはできない。よって，相違点ｄ－１によって，類否判断が左右されないとの審決の判断に誤りがあるとは

認められない。
オ 上記アないしエの相違点を総合して考慮しても，これらが，本願部分及び引用部分の前記各共通点が需要者に対して与える強い共通感を覆し，異なる印象を生じさせるものとは認められない。
したがって，審決の相違点の評価及び類否判断が誤っているとの原告の主張を採用することはできず，審決に取り消すべき事由があるとは認められない。
５ 結論
以上のとおり，原告の取消事由の主張にはいずれも理由がなく，原告の本件請求は理由がないから，これを棄却することとして，主文のとおり判決する。」（本判決45頁～49頁）

【検討】

１．部分意匠の類否判断構造

（１）本願意匠の認定

本件では，「本願意匠」と区別して，「本願部分」を明記している点が注目される。すなわち，「本審決の理由」によれば，「本願意匠」については，「意匠に係る物品を「人工歯」とする別紙１の本願意匠目録記載の意匠（上顎中切歯用の人工歯に係る意匠である意願２００８－０１６９０２号の意匠のうち，歯の切縁部付近の部分の形態に係る部分意匠。以下「本願意匠」という。）」（本件判決1頁～2頁）と認定されているが，これとともに，「本願部分」について，「別紙１の本願意匠目録記載の各写真において緑色に着色された部分以外の部分（以下「本願部分」という。同別紙の各端面図においては，実線で表された部分が，本願部分である。）」（本件判決3頁）との記載がある。

これに対して，前件判決では，「本願意匠」と「本願部分」の区別の記載はない。すなわち，「本願意匠Ｄ（意願２００８－０１６９１４号）は…本願意匠Ａ（意願２００８－０１６９０２号）の…部分意匠であり，また本願意匠Ａ，Ｂ，Ｄ，Ｅは上顎前歯の…人工歯に係る意匠である。」（前判決２頁）との認定，及び，「本願意匠Ｄは本願意匠Ａの先端付近の部分の形態に係る部分意匠である」（前件判決 111 頁）との認定があるだけである（前件判決における本願意匠Ｄが，本願意匠である。）。

上記の「本願部分」とは，本願意匠の「各写真において緑色に着色された部分以外の部分」であるが，その写真（図面）によって「人工歯」の「部分の形態」（本願意匠の形態）が具体的に現わされている。したがって，「本願部分」は，「人工歯」という物品の先端付近の「部分の形態」を意味していると解される。それは，「視覚を通じて美感を起こさせるもの」であるから，まさに意匠法２条１項の括弧書きで定義される意匠，すなわち「部分意匠」であるといえよう。本件判決（本審決）において「本願部分」として認定されているものは，まさに，「本願部分意匠」であって，「本願意匠」と区別して定義する必要がないものと思われる。

しかし，この区別は本審決にとっては，重要な区別であったようで，次の「引用意匠」の認定でも区別されている。

（２）引用意匠の認定

本判決では，「審決の要旨」において，「意匠登録第１２１３９４８号の意匠（別紙２の引用意匠目録記載の意匠。以下「引用意匠」という。）のうち，本願部分との対比の対象となる部分（別紙３及び４の「引用部分」の各写真のうち，緑色に着色された部分以外の部分。以下，同部分を「引用部分」という。）」（本件判決3頁）と

している。
「本願意匠」と「本願部分」との区別に対応するように，「引用意匠」と「引用部分」を区別して，「引用意匠」は「意匠登録第１２１３９４８号の意匠」であり，「引用部分」は「本願部分との対比の対象となる部分（別紙３及び４の「引用部分」の各写真のうち，緑色に着色された部分以外の部分。）」と認定している。ここで疑問に思われるのは，「引用意匠」とされている「意匠登録第１２１３９４８号の意匠」は，部分意匠ではなく「人工歯」の全体意匠であることである。
これに対して，前件判決では，本願意匠に対する「引用意匠」について，全体意匠である「引用意匠Ａ（本願意匠Ａの引用意匠）のうち本願意匠Ｄの意匠登録を受けようとする部分に相当する部分（引用意匠Ｄ）」（前件判決14頁）と認定している。前件判決では，「本願意匠Ｄは本願意匠Ａの先端付近の部分の形態に係る部分意匠である」（前件判決111頁）という「本願意匠Ｄ」の認定と対応するように，「引用意匠Ｄは，引用意匠Ａの先端付近の部分である」（前件判決111頁）としており，前件判決は，「引用意匠Ｄ」を，引用意匠Ａのうち「本願意匠Ｄの「意匠登録を受けようとする部分に相当する部分」（引用意匠Ａの先端付近の部分）の形態に係る部分意匠」と認定していると解される。
以上のように，本件判決の「審決の要旨」では，本願部分意匠の引用意匠として「全体意匠」を認定している。だが，前件判決では引用意匠として「本願意匠の意匠登録を受けようとする部分に相当する部分（の形態に係る部分意匠）」を認定している。「物品（全体）の形態」（全体意）と「物品の部分の形態」（部分意匠）とは，通常，形態が相違し類似しないものである。本件の場合も，その形態は大きく相違する。したがって，前件判決のように，本願部分意匠の類否判断において，本願部分意匠と対比される引用意匠としては，「本願意匠の意匠登録を受けようとする部分に相当する部分の形態に係る部分意匠」とするのが妥当と思われる。

（３）部分意匠の類否判断

前件判決は，「本願意匠Ｄは本願意匠Ａの先端付近の部分の形態に係る部分意匠である」との認定と，「引用意匠Ｄは，引用意匠Ａの先端付近の部分である」との認定に基づき，結論として，「本願意匠Ｄと引用意匠Ｄは，需要者に対して異なる美感を生じさせるというべきであって，両意匠は類似しない」と判断している。
本件判決の「前件判決の理由」では，前件判決の結論を「本願意匠と意匠登録第１１９７５３３号公報記載の引用意匠は，需要者に対して異なる美感を生じさせ，両意匠は類似しない。」（本判決3頁）と要約している。前件判決に従うならば，ここでいう「意匠登録第１１９７５３３号公報記載の引用意匠」とは，「引用意匠Ｄ（引用意匠Ａの先端付近の部分意匠）」と解すべきであり，意匠登録第１１９７５３３号（意匠Ａ）公報に記載されている部分意匠（引用意匠Ｄ）である。
以上の前件判決に対して，本件判決の「本審決の理由」の類否判断の結論は，やや曖昧である。まず，審決の理由の要旨として，「本願意匠目録記載の各写真において緑色に着色された部分以外の部分（以下「本願部分」という。同別紙の各端面図においては，実線で表された部分が，本願部分である。）は，意匠登録第１２１３９４８号の意匠（別紙２の引用意匠目録記載の意匠。以下「引用意匠」という。）のうち，本願部分との対比の対象となる部分（別紙３及び４の「引用部分」の各写真のうち，緑色に着色された部分以外の部分。以下，同部分を「引用部分」という。なお，別紙３及び４の「引用部分」の各写真は，本願部分と同様の向きとなるよう，別紙２の引用意匠目録の各写真が左右反転されたものであり，引用部分は，引用意

匠の左右が反転されたものの切縁部付近の部分である。）に類似するから，本願意匠は，意匠法３条１項３号に掲げる意匠に該当し，同条同項柱書の規定により，意匠登録を受けることができないというものである。」（本件判決3頁）とされている。これは要するに，「「本願部分」は「引用部分」に類似するから，本願意匠は，意匠法３条１項３号に掲げる意匠に該当する」と要約できる。ここでは，「本願意匠」と「引用意匠」との類否判断が記載されていない点が疑問となる。「本願部分」は「引用部分」に類似するとの記載は，「本願意匠」は「引用意匠」に類似すると同義に理解すべきであろうか？

本件判決の「本審決の理由」の最後により詳細な「審決の本願意匠と引用意匠の類比判断」についての要約がある。その類否判断は，以下のとおりである。

「本願意匠と引用意匠は，意匠に係る物品が一致し，また両部分の用途及び機能並びに位置，大きさ及び範囲が一致し，本願部分と引用部分の形態についても，①…（共通点Ｂ），②…（共通点Ｄ）は，…両意匠の類否判断に大きな影響を及ぼすものであり，両部分のその他の共通点ともあいまって，看者に強い共通感を与えるのに対し，両部分の相違点が相乗して生じる視覚効果は，上記共通感を覆すほどのものではないから，両意匠は，意匠全体として類似する。」（本件判決8頁～9頁）

この本審決の類否判断をみると，「本願意匠と引用意匠」に対して「本願部分と引用部分」は明確に区別されており，最初の本審決の認定によれば，類否判断の結論としては，「本願意匠（部分意匠）」は「引用意匠（意匠登録第１２１３９４８号の意匠・全体意匠）」と類似すると判断されていると解される。

前記のように，本件判決が「本審決の理由の要旨」を最初に記載するときに，審決の類否判断の結論どおりに「本願意匠」と「引用意匠」が類似すると記載せず，「本願部分」と「引用部分」が類似すると記載したのは，どのような意図があったのか明確ではない。だが，本願意匠が意匠法３条１項３号に掲げる意匠に該当するためには，本願意匠が引用意匠と類似することが前提であるから，本件判決における「本願部分は引用部分に類似する」との記載は，「本願意匠は引用意匠に類似する」と同義に理解すべきであり，本審決における「意匠」と「部分」の区別，特に「引用意匠」（全体意匠）と「引用部分」との区別を曖昧にしたものと思われる。すなわち，「本願部分は引用部分に類似する」とは，「本願部分意匠は引用部分意匠に類似する」と同義に解すべきであろう。したがって，本件判決は，本審決の認定とは異なり，前件判決と同様に，「本願部分意匠」の類否判断の対象は「引用部分（意匠）」であると解していると思われる。

（部分意匠における「引用意匠」の認定に関する裁判例等については，拙稿「「造形デザイン」の知財判決紹介(9)」（特許ニュースNo.13605,H25.11.22），及び，「意匠法の問題圏（８）」（DESIGN PROTECT 2014 No.102 Vol.27-2,13頁）を参照されたい。）

２．「凹凸面形状」の評価──「一つの意匠的まとまり」

（１）被告の主張

被告は，「相違点ａ－１（正面視の凹凸面形状），ｃ（底面視の凹凸面状及び略波状）について」，いずれの相違点も，「本願部分の唇側面側全体に現れる山状及び谷状の僅かな起伏は，意匠登録を受けようとする部分とそれ以外の部分の境界線により，途中で分断され，まとまりのある創作の一単位とならないような態様で現されている。このため，該部位は，部分意匠である本願意匠の特徴部分とは到底認定できないものである。」として，「部分意匠である本願部分においては，その凹凸面形

状は意匠登録を受けようとする部分に一部が切り取られた形で現されたものであって，具体的な類否判断の対象となるものではなく，明確な相違点として大きく評価されることはない。」旨主張した（本件判決34頁，及び，36頁。）。

（２）原告の主張

これに対し原告は，「被告は，本願部分の凹凸面状の起伏は，部分意匠である本願意匠の特徴部分とは到底認定できないと主張するが，部分意匠であるからといって，特徴といえる形態（平坦部）と特徴といえない形態とに分けて，特徴といえない形態を実質的に無視して類否を判断するという手法は誤りであり，類否判断は，平坦部（ファセット部）とそれ以外の部分の形態とを総合的に観察して行うべきである。」（本件判決21頁）と反論している。

（３）裁判所の判断

本件裁判所は，上記２つの相違点について，まとめて「相違点ａ－１（正面視の凹凸面形状），ｃ（底面視の凹凸面状及び略波状）について」として説示している。

すなわち，「原告は，正面視及び底面視から看取される唇側面の凹凸面形状の有無は，明瞭に視認できる大きな相違点であると主張する。しかし，本願意匠が，人工歯の切縁部付近に関する部分意匠であることにかんがみると，本願部分と引用部分の全体を総合して類否を判断する手法を採っても，需要者の注意を強く惹くのは，当該部分意匠の範囲内で全体として一つの意匠的なまとまりを形成する部分であるというべきである。そして，本願部分の唇側面の凹凸面形状は，その全体意匠においては，正面視で切縁部から歯頸部までの長さの約２分の１以上にわたっているところ（甲１５０），本願部分は，そのうち約２分の１程度（歯全体の下方約４分の１）の範囲のみの切縁部付近を対象とした部分意匠であるから，凹凸面形状は１つの意匠的なまとまりを形成しているものとはいい難く，本願部分を看た需要者の注意を強く惹く部分とはいえない。」と説示している。

（４）「一つの意匠的まとまり」とは

『意匠審査基準』（以下『基準』）によれば，部分意匠については，通常の意匠（全体意匠）の場合の意匠構成要件（①物品性，②形態性，③視覚性，④美感性）に加えて，⑤「一定の範囲を占める部分であること」，及び，⑥「他の意匠と対比する際に対比の対象となり得る部分であること」が部分意匠構成要件として挙げられている（『基準』(71.4.1.1)85頁）。そして，「一定の範囲を占める部分であっても、他の意匠と対比する際に対比の対象となり得る意匠の創作の単位が表されていなければならない。」と規定する（『基準』(71.4.1.1.6)87頁）。すなわち，部分意匠と認められるためには，形式的に「一定の範囲」を占めるだけではなく，「一定のまとまり」がある部分であり，美感を起こさせる「一定のまとまりがある形態（ゲシュタルト）」が視認されなければならない（詳しくは，拙稿「意匠法の問題圏（９）」（DESIGN PROTECT 2014 No.103 Vol.27-3,18頁）を参照されたい。）。

本審決では，「凹凸面形状」について，「本願部分の凹凸の深さは僅かなものであり」と評価しただけであったが，被告は，「凹凸面形状」について，「意匠登録を受けようとする部分とそれ以外の部分の境界線により，途中で分断され，まとまりのある創作の一単位とならないような態様で現されている。」と認定し，「部分意匠である本願部分においては，その凹凸面形状は意匠登録を受けようとする部分に一部が切り取られた形で現されたものであって，具体的な類否判断の対象となるもので

はない」旨主張した。確かに，「凹凸面形状の全体形状」は，本願部分意匠の意匠登録を受けようとする部分には現れない。したがって，本願部分意匠の構成（形態）として，「凹凸面形状の全体形状」を含めることは妥当ではない。

本件判決でも，「本願部分の唇側面の凹凸面形状は，その全体意匠においては，正面視で切縁部から歯頸部までの長さの約２分の１以上にわたっているところ，本願部分は，そのうち約２分の１程度（歯全体の下方約４分の１）の範囲のみの切縁部付近を対象とした部分意匠であるから，凹凸面形状は１つの意匠的なまとまりを形成しているものとはいい難く，本願部分を看た需要者の注意を強く惹く部分とはいえない。」と説示している。しかし，原告の主張は，「本願部分の凹凸面状の起伏」の評価に関するものであり，「凹凸面形状の全体形状」を含めて評価せよとの主張ではない。被告と原告の主張は，やや噛み合わないように思われる。

一般論として，裁判所が説示するように，「需要者の注意を強く惹くのは，当該部分意匠の範囲内で全体として一つの意匠的なまとまりを形成する部分である」といえよう。本件の場合は，両意匠における「ファセット面」が，最も特徴的な「一つの意匠的なまとまりを形成する部分」である。「凹凸面形状の全体形状」は，本件部分意匠においては，一つの意匠的なまとまりを形成しているものとはいい難いことは確かである。しかし，原告が主張する「本願部分の凹凸面状の起伏」は，表面形状の変化形態として視認され，「一つの意匠的まとまりを形成する部分」であり，その「凹凸面状の起伏」については視覚的効果を評価すべきものと思われる。とはいえ，その視覚的効果が「ファセット面」に比較して弱いという評価は，妥当である。ただ，その評価の根拠として，「一つの意匠的まとまりを形成する部分」である「凹凸面形状の全体形状」が，本願部分意匠の構成（形態）でないことを理由とする点はやや疑問が残る。「凹凸面形状」の有無について，「本願部分の凹凸の深さは僅かなものであり」，類否判断に及ぼす影響は少ないとする審決の評価で十分だったように思われる。

３．類否判断における意匠の認定

（１）本願意匠及び引用意匠の認定の意義

本審決は，本願意匠及び引用意匠の形態について文章で詳細に認定している点が注目される。

前審決では，両意匠の形態については，文章による認定は省略され，直ちに両意匠を対比して「形態上の共通点」及び「形態上の相違点」の認定をしていた。前審決と同様に，意匠登録出願の拒絶査定不服審判の審決では，両意匠の形態については，文章による認定は省略され，「図面に記載のとおり」とし文章の認定を省略して，直ちに「両意匠の対比」について記載することがほとんどである。両意匠の形態について文章の認定を省略するのは，意匠の類否判断は，「図面」に基づくことが基本であり，また，両意匠の対比において，同一の内容の文章が繰り返されることから，省略しても実質的に同じと思われるからであろう。

しかし，侵害訴訟においては，本件登録意匠と被告意匠について，必ず文章による認定をしている。両意匠を対比するための認定と各意匠の認定では，やはり少し観方が変わってくる。各意匠の認定をするとともに，両意匠の対比の認定をすることによって，より客観的な類否判断ができるのではなかろうか。本審決では，両意匠の形態について文章で詳細に認定したことによって，より客観的な判断ができたものと思われる。

（２）形態の認定と図面の記載

ただし，本審決の両意匠の形態の認定には，やや気になる点がある。すなわち，意匠の形態としては，「客観的な立体的形態」を認定する必要があるのに，図面の記載に基づき，「正面視すれば」等として各図面の認定になっている点である。本願意匠が「人工歯」に係る意匠で，その形態が微妙な立体形状であり，「客観的な立体的形態」としての認定が難しいものであったと思われるが，各図に基づくとしても，客観的な「形態」を認定すべきてあろう。

前記「凹凸面形状」の相違点についても，本審決では「相違点ａ－１（正面視の凹凸面形状)」と「ｃ（底面視の凹凸面状及び略波状)」として評価しているが，裁判所は，２つの相違点について，まとめて「凹凸面形状」として説示している。また，類否判断の共通点の評価において，本審決は，①「左右側面視すると，傾斜する直線部が大部を占めている点（共通点Ｂ)」と②「背面視すると，平坦部が，切縁部下辺にほぼ接して設けられている点（共通点Ｄ)」とを分けて評価している（本件判決9頁）のに対して，裁判所は，「切縁部下辺の背面に平坦部が設けられており（共通点Ｄ)，そのため，左右側面視をしたときの舌側の辺に，傾斜する直線部が大部を占めている点（共通点Ｂ)」として共通点Ｄと共通点Ｂとをまとめて一つの共通する態様とし，「共通点Ｄ及びこれに起因する共通点Ｂ」としてまとめて一つの共通する形態である「ファセット面形状」について評価しているといえよう（本件判決45頁～46頁)。

一般的に，「正投象図法とは、一見した程度ではその形態が不明であるが、作図された図形を頭の中で構成してはじめて、立体を知覚することができる構成的表現図法」（名古屋地判昭58・6・24「保温着」無体集15巻2号523 頁）なのであって、図面の記載は，それを通じて「物品の形態（意匠)」を認識するための素材である。両意匠の認定においても注意すべき点と思われる。

以上